

野に生きる・水野葉舟論序説 —『遠野物語』以後の国男と葉舟—

小 田 富 英

はじめに

水野葉舟。その名を知る人は意外と少ない。柳田研究においては、『遠野物語』の成立と解釈上の重要なキーパーソンであり、日本の近代文学史上では、小品作家¹⁾あるいは文章作法の独自の領域を切り開いた文人であったとしても、である。私が水野葉舟を意識し始めたのは、柳田国男の伝記研究に入ったばかりの、今から十五・六年も前のことであつた。柳田国男との出会いから葉舟の死までの五十年近くの交流を探ることで、『遠野物語』の成立²⁾についてだけでなく、柳田国男が創り上げようとした学問の秘密がわかるのではないかという漠とした予感があつた。そして、それだけでなく、小品作家として名を成してきつあつた葉舟が、それまで築き上げてきた文壇での力を投げ捨てるように、三里塚駒井野に移住し、開墾生活に入ったことの生き方に強く興味を持ったのである。

下総の山野を愛し、柳田の励ましを受けながら、野鳥と野草の記録者として自らの存在を位置づけ、印旛郡の小学校の教員達を集め、国語教育へ提言を続ける葉舟の姿に、柳田国男が歩もうとしても歩めなかつた実践者の匂いを感じとつたからかもしれない。

同時に、柳田国男が創りあげた日本民俗学は、その学問的資料を多くの提供者から得ただけではなく、学問的方法もまた、葉舟達、数多くの同時代人からの刺激によつて得られたはずだと考えたのである。

私が、これから展開しようとする水野葉舟論は、こうした予感と仮説をバネにし、次のような出口に向つて構成される。ア、葉舟の生活と実践を追うなかから、柳田が創ろうとした学問の創成の鍵を見つける。

イ、二人の交流と、佐々木喜善、高村光太郎³⁾を經由して、

宮澤賢治へと続く文学論を掘り起こす。

ウ、葉舟の国語教育、とりわけ、綴り方教育への態度を明

ちかにする。ことで、生活綴り方運動を中心とした当時の
作文教育を批判検討する。

本稿は、こうした目的をもって展開する水野葉舟論の序章
として、『遠野物語』刊行後三十年ほどたった昭和の初期の
二人の交流を、新資料『葉舟日誌』⁽⁶⁾を中心に追うものである。

—

印旛郡駒井野の「藁の家」と名づけた開墾小屋⁽⁷⁾に移り住ん
でから、十年あまりたった昭和八年、葉舟は日記にその孤独
の心境と焦燥を次のように記している。

「大水野日記 昭和八年六月二十日

△雨、豪雨。一日降りとほす。水量が非常に多い。その水
を受けて、風呂をたき、洗濯をする。ここに移ってから
初めて天水で風呂をわかった。実に美しい水。夕方から
風。夜、悲しい烈風。

△全く心安からず。もっと本式に仕事をしなければならず。
仕事の流れが本式にならず。

六月二十八日

△およそ今ほどうつとして心のせばめられてゐる生活はな
い。孤独で自我の屈した生活。」

この十年の開墾生活のなかで、印旛郡国語教育研究会⁽⁸⁾の顧
問となり、綴り方を指導したり、児童文集の選者をしたりし

て、小品作家水野葉舟の力が地に着いてきたにもかかわらず、
葉舟の心は晴れることはなかった。葉舟が目指した「本式の
仕事」とは一体何であつたのだろうか。

葉舟が、この頃書きためていた「村の無名氏」をまとめ
『小品集 村の無名氏』を人文書院から出版するのは、昭和
十一年の十二月のことである。

葉舟は、後に、この頃をふり返つて次のように述べている。

「昭和十一年の初冬、十幾年かぶりで小品集『村の無名氏』
をまとめた後、もっと正確に季節の推移による自然の相貌を
書きとめて置かうといふ念願をもつた。ところで、それに手
をつけて見るとこの仕事は意外に困難であつた」⁽⁹⁾

つまり、葉舟が望んでいた「本式の仕事」とは、「正確に
季節の推移による自然の相貌を書きとめ」ることと考えるこ
とができるが、その経緯を柳田との関連で、詳しくみていく
ことにしよう。

柳田国男が、日本民俗学の学問的方法を確立しつつあつた
この時期、葉舟もまた、自らの関心を文学の中に位置づけよ
うと試みていた。

葉舟は、昭和九年九月に出版された『日本現代文章講座』
の第六巻に、「報告文の表現と指導」という論文を発表して
いる。

「簡単に、私自身の文章観を土台にしての、報告文とい

ふものに就いて述べる事とする。」(傍点——葉舟)で始まる八ページあまりのこの小論文は、次の三つの観点から興味深いものである。

ひとつは、「報告の文章は、元来、必要な事項を誇張、装飾なしに、且つ脱落なく書くといふ事が要諦である」という葉舟の主張と、採集にあたっての柳田の態度との共通点である。さかのぼること、明治二十八年、柳田国男は「幽冥談」において次のように語っている。

「実際あつた種にしても枝葉を附加へて文飾をして信ずべからざるものにしてある、さう云う物は能く取捨しなければならぬ、僕は、餘程前から期う云う志を抱いて、成るべく広く読んで、其中の直覚的の本当の物、面白く読ませる小説的に書いたものでない珍しい物だけを、現に写し取りつゝ、あなのです。」

葉舟も、この柳田の主張を意識するかのようには、興味を持って集めている怪談話の提供を次のように求めたのだ。

「で、この序言のついでに、自分は読者諸君に斯う言ふ事を希望する。自分は今、或目的を以て少しくこの種の話を集めて見ようと思つて居る。この企については、広く世間の話も聞き度く思ふ。(中略)但し、もし手紙を下さるならば、その事件を決して文学的に修飾せられるやうに希望します。自分の望むのは名文が拝見し度いではなく、よいお話を集

め度いのです。で、なる可く事実をまげぬやう、誇張して凄味を付けやうとせられぬやう。(これは却つてすくなくなるものですから)御注意を希望します。」

採集・採録にあつた二人の共通点は、この頃からのものだが、文学を志していた佐々木喜善が、昔話を童話集として刊行したいと希望した時、柳田国男が、文学としてでなく素材として要求し、できた作品を葉舟が評価するという構図が昭和の初期まで続くことを見逃すことはできない。

二つ目は、記録者として徹しようとする葉舟が、自らに言いきかせるかのような論文であることの意味である。

「私の考ふる必要があるといふのは、第一に出来得るだけ適切な、懸値なしの言葉を使って書き表す心掛けがあるといふ事である。誇張したり粉飾したりした言葉は、殆ど報告の正確を誤るやうになる。」

前述したように、葉舟自身がこの「本式の仕事」を「意外に困難」であつたと述懐するのもまさにこの点にあつた。自然の観察ならば、経験と努力によって可能であるが、それがあるがままに記録していく言葉をつつけることは、自分にどうも、難しいことだと葉舟は考へていたにちがいない。この小論文で、葉舟は、小品作家としての自らの文学観の中に、記録文をどうしたら位置づけることができるかを試みたのである。

三つ目は、最後にあげた「報告文」の実例についてである。報告する内容や、報告する人の必要に応じて、「有効な記述の方法を考へられる事が必要」としながらも、参考例として三つの「学問上の研究蒐集の報告」をあげている。それが、柳田国男の「山村語彙」「自分自身の「下総高原の植物記録」そして佐々木喜善の「江刺郡昔話」「紫波郡昔話」である。柳田の「山村語彙」を「最も周到な、信頼の出来る報告と私は信じてゐる」とし、喜善に対しても「嚴重に学問の道を守って、忠実な聞取書の筆記者として任じられた」として、二人に対して賛辞を贈っているのだ。

そして、自分の報告文については、模範ではなく、「自分の心持」を知ってもらいたいことわりを述べ、次のように説明している。

「私のこの『記録』は、下総高原、主として私の住んでゐる居まはりの植物の目録をつくと同時に、この地方の人々の生活とそれらの植物との交渉を確かめたいと思つてのコレクションである。このコレクションを随時公にして、この高原の在住者の生活の一面からの、研究を報告しようとしてゐるのが、私の目的である。これは全く村民の話の中から拾集める零碎な片々であつて、それを一つにまとめて記載して見ると、おのづから植物対村民の生活の交渉が了解される。」

『遠野物語』刊行の契機となつた運命的な出会いから二十

六年。この時、葉舟は、もう一度三人の關係に戻ることで、自らの「本式の仕事」の意味を確認したと言ふことができよう。

二

葉舟が、孤独に徹して、自らを農耕生活と自然の推移の記録者と位置づけた頃、柳田は、学問的方法と組織を確立して、日本民俗学を築き上げていた。そんな柳田に、葉舟が書き送⁽¹⁸⁾りたかつた書簡が私の手許にある。送⁽¹⁸⁾りたかつたのは、この手紙には消印もなく、切手も貼っていないことから、柳田に届かなかつたのではないかという意味である。しかし、この手紙には、葉舟が柳田に伝えたかつたことや、「本式の仕事」に燃える葉舟の心が吐露されていて興味深い。昭和十年十二月二日に出そうとした葉舟の手紙の内容は、次のようなものであつた。

珍しく突然手紙を差上げます、いつもそんな事ばかりする私なので、自分ながら気がひけるのですが、この頃、心持が生き返つて来ましたので、かうずけずけ手紙を差し上げるのだといふ氣もいたします (中略)

特に、五月と九月の「方言」の「片言と方言と」には感動を深くしま志た。それをこちらの郡の國語教育研究部員に一応是非読ませたいと思つて、高藤君に抜刷の相談も致しかけています。私はどうも人によく泌み入るやうに話を

する事が下手で大切な問題だと思ひながら、それが徹しないで長年苦にして来ました。この話は、何より私の渴望してゐるもので、これで日本の國語教育と称するものの、一転換を劃すべき動機を生むと思はれ、有難くって仕方がない気がしました。(中略)

いつか、勵まして頂いた「児童の作文」あれから仕事のあいまくに書きためましたもの来年は、一くりにして本にしたいと思つてゐます。

それから一つ、印旛郡の方言の方、あれは粗末極まるもので、内心少しく弱つてゐます。私一人だけの、あの次の仕事としては「農家語彙」の採集をやつてゐます。第一回分を一——五〇〇と目標を定めてゐます。この中には多少御役に立つものもありさうに思はれます。

私は只今は採集を目標にしてゐます。それよりは目をつぶつてはみ出さずと考へてゐます。比較力のない採集の無駄骨も考へはしますが、私はこの仕事によって深くこの地方の精神を学び得たと思はれます。それでこれらの仕事は一切学者へ捧げる素材と思つて居ります。

いつも自分独りぎめの心で、手紙を差し上げます。御ゆるしを願ひます。も一つ、御願ひ申し上げたいのは、こちらの研究部の人たちの為に、いつか一回御講話下さいと幸に思はれますが。

実は私はその人たちに対し、一人でやきもきしてゐるのかも知れません。

御健康を祈ります。

十二月二日夜

敬具

水野葉舟

柳田国男様 御侍史

ここですでに「印旛郡の方言の方」というのは、次の年『旅と伝説』の五月号に載せる「下総印旛郡の村言葉」の原稿のことを指していると思われる。この後、葉舟は『方言』にも「村人の生活の一面——方言によつて知り得た——」(七月号)と題する報告を発表しているが、その最後をこのように結んでいる。

「この地方の方言に就いての私の採集は極めて貧しいが、それにしても、私の心が触つて伝へられてゐる連想はいくらでも出て来る気がする。しかしこれは決して学問としての確かなものでない事は自分でも感じられてゐる。たゞ一つこの入口から、密接に村の人の血肉に触れて感じる私の経験を報告したにすぎない。このやうなものを、学問の雑誌に公にするのは、分を犯してゐるはしないかと、切に恐れてゐる。その上かうやつて書いて見ると、一わたり上つ面の処をなでたや

うな『通常』から、一分も下に掘り下げて行き得ずに終ったのに、自分ながら呆然となつてしまった。」

「粗末極まりない」理由は、実はこうした意味なのだと言っているかのような一文である。柳田は、全国の方言や語彙の採集を通して、心意を読み取る学問の方法を確立したが、葉舟は、一地方の浮かんでは消える民衆の自在な言語表現の記録者となることで、その土地と村人の中に入っていきると考えていた。

「学問の上から見て、私の感じ方見方は、客観性の希薄なものであるかも知れないが、方言に依つてその地方のきぢに触れる事の出来るのを私は甚しく喜んでゐる。」(傍点——葉舟)

自分の机の前の窓から見える草木や野鳥や野草を「隣人」として愛し、記録することを「本式の仕事」と位置づけた葉舟は、柳田の刺激を受けて始めた、方言採集によつて「隣人」としての村人の心の中に入り込むことができたと言ふことができよう。

その上で、自分が採集した方言や語彙を「一切学者へ捧げる素材」にして欲しいと願うのである。

昭和十二年に入って葉舟は、遠山村吉倉に住む篤農家甲田健之助翁⁽¹⁵⁾に出会い、甲田翁からの聞き書きを目的とした「下総郷土談話会」を六月に発足する。その発会の趣旨の中で次

のように述べている。⁽¹⁶⁾

「我々のいつも残念に思うことは、この郷土に於ける現状の破壊が刻々急速に行われてゆくのを見ることである。林が伐られる。道がくずされる。丘があばかれる。寺、社が荒廃してゆく。無意識に町が拡がる。交通の変転が起る。衣服が変り、用具が変る。生活のおのずからの変更。広い意味の信仰の推移。その反映としての土地の人の思考意識の変転。それらは勿論やむを得ない生活の進展に伴つてゆく現象の推移である。この激しい推移の中で湮滅しようとしている『過去』を記録したいという熱望である。この仕事を始めることによりこの郷土を一層深く徹して知ろうと思つている。(中略)

そしてその記録を貴重なものとして、この学問の先輩に贈らうと思ふ」(傍点——筆者)

この「学問の先輩」とは、言つまでもなく柳田国男のことである。

下総郷土談話会の活動については、別章で述べることとするが、なぜここで触れたかと言つと、この昭和十年の手紙から、この頃の葉舟の「学者に捧げる素材」を採集する決意が、芽ばえはじめたことを知つて欲しいからである。

葉舟の「本式の仕事」は、柳田の学問が開いたことで、新たな意味をつけ加えたと言ふことができよう。

昭和十年といえは、柳田国男にとって、大きな意味のある年であった。日本青年館において、日本民俗学講習会が開かれ、全国からの参加者の熱気は、全国的な組織と、雑誌の発刊を決定するに至った。九月に創刊される『民間伝承』がそれである。

下総の地にあつて、この学問の役に立ちたい、『民間伝承』に資料を提供したいという葉舟の願いは、自分を慕ってくる国語教育研究会や、七葉会⁽¹⁷⁾の会員たちの気持ちを高揚させ、協力させることぬきには実現不可能であつた。

葉舟は、彼らの合意を得るために、柳田国男に講演をしてくれるよう頼んでいるのである。

この下総における柳田国男の講演会が実現するのは、昭和十六年五月二十八日のことであり、今しばらくの時間が必要であつた。

昭和十六年二月十四日、上京していた葉舟は久しぶりに柳田を訪ねている。

「昭和十六年二月十四日 東京

△朝くづくつして午すぎに出かける。柳田さんを訪ね、十年ぶりでゆるゆる話す。□（不明）年をとられたし、かし元氣いっぱいなのに感動する。「野草雑記」を贈られる。

二月十五日 東京——大水野

△高村君を訪ねて砂糖をもらつて帰る」

この高村君というのは、生涯無二の親友であつた高村光太郎のことである。上京して、二人に会いに行つたのは、共通の用件であつたと想像することができ、葉舟の年譜から考えて、歌集『滴瀝』の出版記念会の発起人の依頼と考えられる。帰宅してからも、二月二十一日、二十五日、三月二日、十日と頻繁に柳田へ手紙を書き送っている。なかには、食用草木の研究をしている葉舟らしく、次のような一節も見る事ができる。

「二月二十四日 大水野

△イボタ・コトヒ⁽¹⁸⁾の焙つたのをすり鉢でこなにして見る。

ぐあいよく粉にする。それを入れてのむ。芳香、やや匂ふ強いと思はれる。

早速あとを焙つて柳田さんに送る事にしよう。

二月二十五日

△柳田さん、清水又雄君に本の小包。

二月二十六日

△午後、染谷君来てくれる。柳田さんの要求を□（不明）

へ近々訪問してもらう事にした。具体的によくのみこんで貰ふ事が必要と思ふ。」

「柳田さんの要求」とは、「柳田さんへの要求」ということ

とで印旛郡国語教育研究会での講演依頼ということではないかと思われるが、この後、染谷四男¹⁹也が、柳田を訪問したとの一節が日記に明記されている。

「三月十四日

△柳田さんからネヅミモチのついたしらせの葉書。滴瀝について好意をよせて来られた。

三月二十八日

△染谷君から葉書、二五日に柳田さんを訪問したよし。

四月十六日 東京

△朝 まづ 柳田さんに電話をかける 今日都合が悪いから明日来いとの事。

四月十七日

△柳田さんを訪問。ひどく疲れている。五月九日頃見えるとの事。庭を歩いてみたりいろいろして昼めしの御ちそうに成って帰って来る。

△その足で高藤君を訪ねる。勿論するつもり 細君お電話をかけてくれたので、帰って来るとの事。そこで泊めてもらう事にして、ゆっくりする。夜 いろいろの話をする。

四月十七日 東京

△午前うちに柳田さんを訪ね。昨日大遠足をしたといつてひどく疲れてゐられる。イボタコーヒーは否定された

が意見は面白かった。庭をよく見 柿の話をし、昼めしの御ちそうになって帰る。

△成城の町でキャウガノコを買って来る。蛇窪には沢山繁 冒して困った草だが、久しく見ないのでやはりこひしくなる。」

この日記から、柳田の講演は、当初の予定では五月九日頃であったことがわかる。一方、柳田国男年譜によると、九日は、日本方言学会の、敬語に関する座談会に出席していることとなっているので、延期されている。

葉舟のこの時の上京の目的は、四月十九日に開かれる『滴瀝²⁰』の出版記念会にあった。

発起人は、柳田国男の他に、高村光太郎、斉藤茂吉、前田夕暮、窪田空穂、野尻抱影、北原白秋、安成三郎、山崎斌の九人が名を連ねた。場所は、築地芳蘭亭で、この時の様子を、折口信夫は次のように述べている。

「ようべの会はよい会でした。『滴瀝』の出版を記念する為が集った人々で水野さんの友人と、水野さんの門下の人と、凡そ半々で、しかも小じんまりして、近頃になくいい感じを持つて帰りました。ここ三年程お目にかからぬ²¹中に、あれほど若々しかった水野さんも、頬が落ちこんだりして、どこか年が出て来たやうに感じました。」

この折口の文章は他に、葉舟の若い頃の文壇での活躍、開

墾生活の中での家庭の苦勞、そして歌人としての評価と興味ある記述が続く。折口が言うように、この出版記念会は、葉舟が、自分の許に集う弟子達と、第一線で活躍する学者や文学者の友人達を出会わせたという大きな意味を持っていた。いずれにしても、葉舟にとつて、久し振りに訪れた晴れ舞台であつたにちがいない。

五月九日に予定していた柳田の講演は、延期したものの、柳田の旅行などもあつて、日程を決めることができなかった。東北民謡試聴団の団長として東北地方を回つてきた柳田は、帰途、葉舟に電報を送っている。

「五月二十三日

△午後少しすぎに柳田さんより電報、二十八日とほ(?)早速通知状にかかる。

五月二十四日

△通知状十六通 小倉君の分残り

篠田郡に葉書 柳田さんに葉書 何れも当日の打合わせ

△それを送つて学校にゆき、清水君にあつて廿八日の話を「する」

こうして、念願の柳田の講演会は実現した。遠山小学校(現成田市立遠山小学校)を会場とし、演目は「方言の調査について」であつた。葉舟が、印旛郡国語教育研究会の教員達に何を望み、何をして欲しかったかが何えよう。

四

土地に根をはって、農耕と自然の記録と、民俗学の資料の採集と、そして、救荒植物の研究まで自在に活動する葉舟を見て、柳田は何を思つただろうか。その上で、その土地とは、自らの故郷と行つてもよい下総の台地である。

五月二十八日の夜、葉舟の家に泊つた柳田と葉舟との間に、どのような会話が交されたか知る術もないが、明治三十四年の出会いから四十年の思い出で話は尽きることはなかつたことであらう。

柳田の講演で勇気を得たのは、葉舟だけではない。柳田もまた、葉舟の存在を心強く思つたにちがいない。この後も、二人の交信は続く。

「昭和十六年十月二十九日

△柳田さんより葉書 栗がついたしらせ

十一月十一日

△柳田さんよりベニバナの催促

十一月十三日

△柳田さんに葉書 柳田さんにベニバナの種子の小包。

十一月二十四日

△柳田さんの方よりの人、丸山久子、矢部百合子、池田弘子さんといふ三人が今日か天気よければ明日来るといふ



昭和16年5月28日 水野葉舟の自宅にて(水野清氏蔵)

葉書。」

木曜会で昔話の採集などを始めていた三人が、柳田の指示で、葉舟に協力を求めにきたのであろう。柳田が、葉舟を学問的協力者として評価していたのは、次の一節からもわかる。太平洋戦争に突入し、物資も窮乏してきた昭和十七年の九月二十七日の日記である。

「九月二十七日

△柳田さんより手紙 内に金を五十円入れてある。こちらの方言会その他へ使へとの事。

九月二十八日

△柳田さんより「伊豆大島方言集」の小包。」

葉舟の体の具合がすぐれないことを知ると柳田はすぐに見舞いの葉書も出している。

「昭和十八年十二月七日

△柳田さん親切に鼻の薬を教へて下さる。野尻君仕事を激励してくれる

高村君も気にしてくれよし」

柳田と友人達の激励を受けて、葉舟は、年が明けての日記に次のように書き、自らの気持ちを奮い立たせた。

「昭和十九年一月十四日

△今年の仕事の計画

一、明治文学の胞動期(単行)

一、移住雑記

(単行)

一、歌集題未定

(単行)

一、食卓雑記

(単行)

そして、三月二十九日には、『明治文学の潮流』(紀元社)に収められる「野辺のゆきき」の項を脱稿している。紙も欠乏し、書くこともままにならない状況の中で書きあげたこの評論集は、東京を離れた葉舟ならではの文学史であると同時に、柳田との心の交流を再確認するための書となった。最後に、「野辺のゆきき」の冒頭の一節を引用して、この項を閉じることとする。

「『野辺のゆきき』は、『抒情詩』の中に入れられてゐる松岡國男氏のささやかな集である。松岡國男といふのは、現在の柳田國男先生の若い日の名で、匿名ではなく舊の姓である。

私はまだ学生の時分から、この『野辺のゆきき』に含まれてゐる抒情の詩、それに入つてゐないで——その後に公けにされた作品であらう、雑誌『帝國文学』その他に散らかつて公けにされてゐた作品を極愛してゐた。そして、今尚ほその愛着の心が少しも變らないのを感じる。それは青年期の初めに、詩作に耽つてゐた時分『若菜集』を身から離さない程に愛誦したが、それよりも深く私の心を動かした作品であつた。今でもその日頃を考へて来ると、すぐ口にその美しい詩が誦

(注)

(1) 明治四十年代に入つて流行したジャンル。短篇小説の一步手前の手法として、国木田独歩の『武蔵野』などもその範囲に入るとされている。水野葉舟は、こうした小品文の第一人者とされ、明治三十九年七月、自費出版で刊行した『あららぎ』(金曜社)を振り出しに、代表作の『隣人』(昭和十八年八月、今日の問題社刊)まで十四の作品集を刊行している。

また、小品文の解説書として、葉舟自身、『小品作法』(明治四十四年七月、文栄閣)『小品文練習法』(大正四年四月、新潮社)『小品作法』(大正七年九月、春陽堂)を著し、その普及に努めた。

(2) 拙稿「柳田國男の青春(4)」(『伝統と現代』六四号、昭和五十五年五月号)

(3) 水野葉舟・柳田國男・佐々木喜善の三者の出会いと、『遠野物語』の解釈研究における水野葉舟論については、次の先行研究がある。

山田清吉「水野葉舟と遠野物語」(『楡の木』昭和四十二年一月)

同「水野葉舟と佐々木喜善」(『風炎』昭和四十七年一月)

同「柳田國男と水野葉舟上・下」(『風炎』昭和四十七年七月・八月)

十一月十七日)

同 『水野葉舟の『遠野紀行』』(『岩手日報』昭和四十八年十一月三十日)

岩本由輝 『もう一つの遠野物語』(昭和五十八年四月、刀水書房)

石野(森田)元美 『遠野物語』その成立をめぐって

(『民話の手帖』昭和五十九年四月)

(4) 『隣人』(昭和十八年八月、今日の問題社刊)の序文に次の一節が見える。

「ところでこの集の初めに入れた『日記の中から』は、嘗て柳田國男先生が山野觀察の日記をまとめるやうに行つて勵して下さつたのに勵され、書き始めたものであるが中途で自らつまづいてしまった。」

(5) 水野葉舟と高村光太郎は、生涯無二の親友として交流を深めた。高村光太郎は、昭和二十二年三月号の『自明』の葉舟追悼文を「水野葉舟君は私のたった一人の生涯かけての友達だった。」とはじめている。二人の交流については、『光太郎と葉舟』(山田清吉・北川太一編・葉舟会刊行)に詳しい。

(6) 水野葉舟の御子息である水野清氏の御厚意により閲覧することができた葉舟の日記類のこと。近代文学館に葉舟の原稿等の貴重な資料と共に保管されている。保管されている日記の年代は次の通りである。

・大正六年より七年(大学ノートをばらしたペン書き五十枚)

・昭和八年(新聞の切り抜きが貼ったものが多い原稿用紙約四十枚)

・昭和十六年より二十年

(7) 『光太郎と葉舟』の年譜によれば、この開墾小屋は、もととは高村光太郎が日本画家山脇兼治郎のために建てたものであり、大正十三年五月、葉舟が山脇から譲り受けてひとりで住むことになる。

地番は、千葉県印旛郡遠山村大字駒井野字大水野であり、偶然に葉舟の姓と同じ名であった。

(8) 印旛郡の小学校の教員を中心に、昭和三年発足された会。創立時から顧問に、野口雨情や浜田広介らが名を連ねている。葉舟が顧問となったのは昭和五年のことだ、このいきさつについては、会の中心メンバーであった染谷四男也(葉舟没後設立された葉舟会会長をつとめる)が、次のように述べている。

「私が、遠山小学校教員の紹介で水野葉舟とお目にかかったのは昭和四年であつたと思う。その後再三あう機会にめぐまれて国語教育言葉の問題、地方文化について話合うことに肝胆相照らすか、私の師友として感嘆することも深く、国語教育研究会の指導者として、この人こそと思ひ顧問にいたただいたのである。」(『千葉県の教育に灯をかかげた人々』『千葉教育』昭和五十二年十月号)

(9) 昭和十八年八月、今日の問題社より刊行した小品集「隣人」の序文。葉舟の言う「隣人」とは、葉舟の家の窓から見える草木や野鳥達のことであり、この序文の中にも、「草木に対して隣人の情感を抱いて見る心は、私には比喩でなしに現つての心持である」の一節が見える。

(10) 『新古文林』明治三十八年九月号に載つた柳田国男の談話。天狗や幽冥や不可思議を研究することが、国民の歴史や性質を知ることになると明言して、初期の柳田学研究に欠くことのできない資料となっている。

(11) 『日本勸業銀行月報』明治四十二年七月号。

(12) 大正五年十月二十八日の喜善宛柳田書簡（定本『柳田国男集』別巻四）

(13) 水野葉舟研究者の山田清吉氏からいただいた封書。表書きは、『東京市外 砧村 柳田國男様御侍史』裏には、十二月二日夜と書かれ「千葉県印旛郡遠山邸大水野 水野葉舟」の印が押されている。書き綴つたものの、何らかの理由で投函しなかつたと思われる。本文で略した部分に、じぶんの原稿を「朝日」に頼んで欲しいということも書いてあるので、このことが原因であるかもしれない。

(14) 高藤武馬（法政大学名誉教授）のこと。『ことはの聖』（昭和五十八年、筑摩書房）によると、この当時、雑誌『方言』の編集者として柳田の教えを受けていた。

(15) 文久三年生まれ。独学で植物学や気象、土壤等を研究し、水稻の品種改良に成功し、「素人の百姓博士」と尊敬されたと言う。昭和九年十二月号の『アサヒグラフ』に紹介された。

（山田清吉「下総郷土談話会の記——甲田健之助と水野葉舟」『楡の木』昭和四十五年一月号）

郷土の中の甲田健之助のような故老への脚光が、柳田国男の学問とどのように関わりをもつのか今後の課題としたい。

(16) 前述の山田論文よりの引用。原文は『新更』（昭和十二年月不明）

(17) 昭和七年、葉舟の許に集つて青年達を集め、文学活動を主な目的としてできた会。

『千葉毎日新聞』に寄稿したり、自分達の回覧雑誌『さそり』（現在は、成田市立図書館にその一部が保管されている）を発行した。昭和初期の青年運動との関わりや位置づけなど、今後の研究課題である。

(18) 『日本国語大辞典』（小学館）によると、「モクセイ科の半落葉低木。枝に寄生するイボタロウムシの分泌する蠟（ろう）は蠟燭の原料。材はきめが細く楊枝（ようじ）などを作る。」という。

(19) 今回、山田清吉氏を通じてお会いし、この時期の葉舟と柳田の交流を知る人としてお話を伺うつもりでいたが、最近亡くなられたとのことで、聞くことができない。

(20) 古川書房より昭和四十七年に復刊されている。

窪田空穂「水野葉舟君の『滴瀝』」

折口信夫「水野君の会から帰っての茶話」(本文に引用)

『遠つびと』昭和十六年五月)

野尻抱影「『滴瀝』の星」

山田清吉編の年譜と「あとがき」が収録されている。

(21) 折口信夫は、印旛郡国語教育研究会主宰の講演を、昭和十二年六月に成田小学校で行っている。水野葉舟と会うのは、その時以来のことであろう。

(22) 今回、遠山小学校の学校日誌や講演記録の調査まですることができなかったが、前述の折口や野尻抱影の講演内容も含めて今後の課題としたい。

(本研究所会員・柳田国男研究会会員)

伊那民俗研究

第 4 号

1994年3月